

## 西部防空情報隊女子通信隊の一員として

福岡市南区 川副 華子

昭和19年5月1日、私は1ヶ月の教育期間を終え女子通信隊の一期生として、厳しく衛兵の立つ西部軍司令部の門をくぐった。

今の高等裁判所がある上の橋だ。

西部軍の防空を掌どる防空庁舎はその後方1mもあるコンクリートの壁に包まれ、二重の建物である。1tの直撃弾にもビクともしないということだ。扉も鉄製で二重になっている。

中は作戦室をはさみ右は情報室、左は警報室だ。各地到る所に民間の監視哨があり、その情報が本部に送られ、そして西部軍に伝わる。情報室でそれを受け、操作板のキイを押すと作戦室中央にある九州地図に敵だと赤、味方だと青がつき、電光板に場所、時刻、単機又は編隊、進攻方向が映し出される。私達は軍国主義により何よりも御国のためと教育されてきた。通信隊は今まで男子でしたが、初めて女子となった私は一期生なのです。女子でも直接国防に携さわるという感激はこの上ありませんでした。

西部軍管区は広島より以西、四国全部九州全体ととても広いのでした。勤務以来、特に瀬戸内海の飛行機の往来は激しく、善通寺師団管轄の電話の担当の人は大変でした。

それに要塞電話もあり、レーダーによる情報も入って来ました。(今からみると簡単な物だったと思うのですが)

私達は200人位で3小隊に別れ、日勤、夜勤、非番となって行くのです。夜勤は前半は12時半まで、後半は12時半より6時まで、そして8時までは夜勤全部です。宿舎は赤坂門の今の福岡獣医師会館のところで松隊と呼ばれてました。

戦局不利になると日毎に空襲があり、作戦室には高級参謀がキラ星の如く並び、連絡将校が走り回り、情報室は嵐の如く警報を出したり、情報を受けたり、皆の声がわあーんとこだまして戦場でした。

20年5月からNHKラジオが直接情報室に入り、ここから西部軍防空情報を流すようになりました。

昭和20年6月19日、私は夜勤の後半勤務で仮眠中「非常呼集」という分隊長の声に起こされ、あわただしく夜道を走り防空庁舎に入りました。満天の星を見上げながら本当に空襲が有るのだろうかと思いながら。

慌ただしく空襲警報のベルを押す作戦将校、また情報室は戦場です。どうも福岡がやられているらしい。皆真剣な目でうなづき合いました。新米の人はお家が燃えると泣き出すし、大丈夫だよといいながら、私も肉親にまた会えるだろうかと思いました。

一瞬グラッとして電灯が消えました。皆はっとなりましたが、またすぐつきました。後で屋上に行くと100kg不発弾が横たわっていました。

やっと朝になって空襲も止み、私達は市民のために炊き出しをするようにといわれ、まだ赤い煙りの中、熱いご飯でおにぎりを作りました。

やがて勤務を終え、表に出ますと、隣の24連隊は全部焼けてまだくすぶっております。

私達の宿舎も全焼です。

街は熱くあちこちに煙が上り、建物は全てなく瓦礫のようでした。

ぼう然とした人がリヤカーや大八車を押して、ぞろぞろ歩いています。皆顔も手足も真黒、衣類も焼けたり破れたりしています。

中洲玉屋の前に立つと家が一軒もなく、皆焼野原で海がキラキラと見えました。

電線は垂れ下がりむっとする熱風が襲います。これでもう福岡はおしまいかないかと思いました。

7月に入ると空襲は激しく、私達は徹夜の日々が続きました。次第に電話は不通になり、ランプのつかない監視隊が多くなりました。

8月、どうも戦争が不利だという事は私達にも判ります。もう皆死ぬのだ。あわよくば情報室で死にたいと思いました。

8月9日、私は長崎本部の担当に昼12時に交替しましたが、前の勤務の方が、長崎に新型爆弾が落ちたらしいといわれました。次々に送られる被害情報、長崎はどの線も不通、この線だけが通じているのです。長崎の情報を送る女の方もウチも燃えたいと涙声でした。情報が良く取れず、参謀もいらいらし、私はドナラレどうしでした。

8月15日、私は非番でしたので家のラジオで終戦を知りました。どうして！。あんなに一生懸命働いたのに。これから日本はどうなるの。暑い夏の日、まるで水を浴びたように体が冷たかったのを覚えております。

16日勤務、司令部は混乱の極みだった。書類を焼く火は昼夜天を焦がし、右往左往する人、あの秩序正しかった作戦室は今はひどかった。血走った眼で決戦を叫ぶ参謀、茫然自失としている将校たち、それでも情報室は連絡機が上空を飛び交いわりと忙しかった。

鹿屋本部についてる人が言った。特攻機が飛び立ったと……終戦になったのに……。

突然宮崎に赤ランプがついた。敵機だ。2つ、3つ、4つとそれは多くなる。作戦室から将校が飛んで来る。「間違いありません、海上に敵大型海軍哨海機です」と鹿屋監視隊本部担当の人が言う。参謀がドナル。「かまわん陸に近づいたら撃ち落とせ」。しかし、その機は大分の海上まで北上すると姿を消した。きっと偵察に来たのでしょう。

私は髪を少しきって包み、操作板の間に挟み込んだ。もう二度と触れる事のない操作板、さよなら、よくガンバッタね。しみじみ操作板につぶやくのでした。

16日に解散式があった。米巡洋艦が博多湾に来ているのですぐ逃げるように（これはデマでした）。海行かばと唱う部隊の男の人。そして号泣……私は今まで男の人があんなに泣くのは見た事がありません。

それから4、5日してからすぐ集まるように連絡を受けて行くと、一部の将校が終戦はイヤだ、九州だけで決戦をしようというのです。日本が一体になって戦うのならとにかく、九州だ

けでは必ず敗けます。ポツダム宣言を受理してからは時の流れは変わったのです。親友と二人  
帰る道、司令部の木立の中、蟬だけが無心に鳴いておりました。

終戦から50年、あれは私の青春でした。二度とない経験でした。今もはっきりと心にその  
場面場面が鮮やかに浮き上がります。

そしてあんな悲惨な事は二度とあってはいけません。いつまでも平和な日本であってくれと  
願う私です。